

2022年6月22日

第18回(2022年度)日本シェリング協会研究奨励賞選考委員会報告

委員長 橋本 崇

1. 選考経過

昨年度同様、選考の対象を「シェリングあるいは関連する同時代の思想、芸術、文学、宗教に、直接あるいは間接に関わる著書、博士学位論文、または複数の公刊論文」として、2022年3月末を期限に会員から候補者を募った結果、候補者として3名の推薦(自薦2名、他薦1名)の応募があった。

まず、3名の候補者について、「将来更に独創的な研究者となると見込まれる、ほぼ45歳までの方」という条件に関して、4月中に第一次選考を行ったところ、3名ともに45歳を越えているが、2名は既に常勤職にあり、さまざまな学会で活発な活動を展開しているのに対し、松岡健一郎氏のみがまだ常勤職にないことが確認されたため、第二次選考の対象者とする事になった。

5月から6月にかけての第二次選考においては、文学分野の胡屋委員、小野寺委員を中心に査読を行い、その査読結果を基に、委員会で審議した結果、全員一致で、松岡氏に第18回研究奨励賞を授与することが決定された。決定に当たっては、「書籍もしくは博士論文のように一定の分量のあるものではなく、1本の論文と2本の翻訳に1本の書評を加えたイレギュラーな形で、全体的に「業績」を評価している点について、委員会としての見解を確認したいという意見が寄せられたが、松岡氏は既に11年前に同志社大学に博士論文を提出して、博士号を授与されており、審査対象には出来ないものの、博士学位論文に相当する業績があることを前提として、授与することについて合意が成された。

なお、この第一次選考の過程で、推薦者から選考対象基準について、従来の「原則45歳以下、又は、常勤職にない者」をより明確にすべきであるという意見が寄せられた。今後選考委員会では、「研究奨励賞」の趣旨に即して選考対象規準についてさらに協議していく事になった。

2. 松岡健一郎氏の受賞対象業績

- ① 「シェリングの対話篇『絶対的同一性の体系について』」『シェリング年報』(第28号、108-116頁 2020年)
- ② 「フリードリヒ・シュレーゲルにおける『フィヒテ知識学の精神』とその射程」(日本フイヒテ協会編『フィヒテ研究』、第18号、66-79頁、2021年)

- ③翻訳「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート（一）」（同志社大学哲学会編『哲学論究』、第31号、40-64頁、2017年）、「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート（二）」（同志社大学哲学会編『哲学論究』、第34号、29-51頁、2018年）、「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート（三）」（同志社大学哲学会編『哲学論究』、第34号、29-51頁、2020年）
- ④翻訳「絶対的同一性の体系について。著者とある友人との会話。」（『ヘーゲル全集 第3巻』（知泉書館、213～301頁、2020年）
- ⑤ 書評「Nobuyuki Kobayashi: Ästhetische Revolution und Phantasie. Studien zu den ästhetischen und geschichtsphilosophischen Ansichten Fr. Schlegels bis 1800, Lit Verlag, Münster, 2018. 」『シェリング年報』（第29号、46-55頁、2021年）

3. 受賞理由

フリードリヒ・シュレーゲルの思想を長らく研究対象としている松岡健一郎氏は、同志社大学文学部の哲学科出身であり、2011年に同大学に提出した博士論文がヘーゲル論理学の無限性理論に関わることにも示されているように、ヘーゲルやフィヒテ、シェリングを中心としたドイツ観念論に関して深い理解を有する研究者である。本研究奨励賞の審査の対象となる業績は、シェリングやヘーゲルに関わる論文および翻訳だけでなく、文学や美学の側から考察されることが多いフリードリヒ・シュレーゲル思想をドイツ観念論の観点から考察した論文とシュレーゲルのテキストの翻訳、書評が含まれる。その全体では、テキストにじっくりと腰を据えて向かい合い、その内容の分析に粘り強く取り組む資質が、論文の内容や語り口とともに翻訳の緻密で丹念な日本語に示されている。こうした取り組みに基づいて、松岡氏が論文の中で独自の見解を見出す研究のあり方は、今後、シュレーゲルやドイツ観念論思想をめぐる新しい布置連関を明るみに出す可能性が考えられる。

4. 各対象業績についての講評

- ① 「シェリングの対話篇『絶対的同一性の体系について』」『シェリング年報』（第28 108-116頁 2020年）

この対話篇で展開される哲学的な諸問題は従来十分に検討されてはこなかった。松岡氏は文献学的研究能力を本稿でもいかに発揮し、同対話篇においてすでに、ヘーゲルの『差異』論文でいわれるところの「アンチノミー」の思想がみられること、またそれが、シェリングの主張する絶対的同一性の体系への「入口」として規定されていることを明らかにした。差異と同一性の問題が、ドイツ観念論ならびにドイツロマン主義を中心とする当時の議論において中心的な役割をはたしたことはいうまでもない。松岡氏の論は一見すると地味な対象をあつかっているようにもみえるかもしれないが、たんにシェリングおよびヘー

ゲルの思想の究明のみならず、当時の思潮全体の理解に対しても大きな意義をもつと思われる。

- ② 「フリードリヒ・シュレーゲルにおける『フィヒテ知識学の精神』とその射程」(日本フィヒテ協会編『フィヒテ研究』、第18号、66-79頁、2021年)

松岡氏は、シュレーゲルがその知識学批判において、まずフィヒテを神秘主義者として規定している点に着目するが、その上で、シュレーゲルがフィヒテ批判の矛先をフィヒテ思想の「文字」ではなく、フィヒテ知識学の「精神」に向けている点を指摘し、この観点からアテネウム期に至るまでの彼の思想形成のあり方を、エンチュクロペディーの概念などを参照しながら、松岡氏独自の形で浮かび上がらせている。

- ③ 翻訳「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート(一)」(同志社大学哲学会編『哲学論究』、第31号、40-64頁、2017年)、「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート(二)」(同志社大学哲学会編『哲学論究』、第34号、29-51頁、2018年)、「フリードリッヒ・シュレーゲルの『哲学修養時代』——哲学ノート(三)」(同志社大学哲学会編『哲学論究』、第34号、29-51頁、2020年)

フリードリヒ・シュレーゲルの膨大な遺稿断章群の一つ『哲学的修業時代』の一部を日本語に訳したものである。シュレーゲルが、1795年ごろまでギリシア研究に専心していたあとに哲学的な関心が急拡大する点はシュレーゲル研究においてしばしば注目されている。しかし、この時期のシュレーゲルのカントやフィヒテ、シェリングの受容の詳細については論じられることが少ない。特に、日本のロマン主義・観念論研究者をはじめとするドイツ思想や哲学に関心のある者にとって、本邦訳は、ドイツ観念論とロマン主義の関連を詳細に知るための中心となるテキストの一つとなりうるものである。翻訳の文体については、ドイツ語の難解さとその内容の秘教性が知られるシュレーゲルのドイツ語を非常に明快で読みやすく、格調のある日本語へと移し替えている。

松岡氏のシュレーゲルの『哲学的修業時代』の邦訳は今後も継続する予定であり、こうした観点からも、本翻訳は大きな評価に値すると言える

- ③ 翻訳「絶対的同一性の体系について。著者とある友人との会話。」(『ヘーゲル全集 第3巻』(知泉書館、213~301頁、2020年)

シェリングの対話篇「絶対的同一性の体系について、およびその最近の(ラインホルトの)二元論に対する関係について。著者とある友人との会話」を、日本語に翻訳したものである。18世紀から19世紀にかけてのドイツでは、哲学者や文学者たちがさまざまな雑誌をつうじて自身の思想や立場を表明し、それがドイツ観念論のめざましい展開に大きな寄与をなしたことはつとにしられる。しかし、少なくとも日本国内においては、彼らの議論の実像が十分に知られているとはいえない。同対話篇は、そうした議論を伝える文書のなかで

もこれまで光をあてられることが比較的少なかったが、松岡氏は的確な日本語訳を通じて、当該の文書が哲学史においてもつ意義を明らかにすることに貢献した。

論争的な性格をもつ文書の翻訳は、原文をそのまま日本語に移すだけでは脈絡が伝わらないことが多いため、議論の背景と文脈をふまえたうえでさまざまな工夫をする必要がある。それが哲学的な議論ともなればなおさらのことであろう。松岡氏の翻訳が読みやすく明快なのは、随所で読者の理解を助けるような工夫がなされているからだと考えられる。本翻訳は氏の今後の活躍が日本におけるドイツ観念論の理解にさらなる寄与をなすことを期待させるものである。

- ⑤ 書評「Nobuyuki Kobayashi: Ästhetische Revolution und Phantasie. Studien zu den ästhetischen und geschichtsphilosophischen Ansichten Fr. Schlegels bis 1800, Lit Verlag, Münster, 2018.」(『シェリング年報』(第29号、46-55頁、2021年))

書評対象である小林氏のドイツ語の著書は、シュレーゲルの詩学思想にあるイロニーとのファンタジーの密接な関係を、ヴィンケルマンやホメロスを中心とした古代ギリシアの受容と、フィヒテの知識学の受容の関係を考察しつつ、美的革命の理念を参照しながら、シュレーゲルのイロニーの概念の淵源が彼のギリシア観の中にあることを明らかにした研究である。松岡氏は、小林氏の著作の全体の概要と論点を要を得た簡潔な文体で紹介し、さらに、小林氏の研究に不足した部分を指摘し、そのことによって、松岡氏自身のシュレーゲル思想への独創的な見解を垣間見せている。